



All
Apologise.

主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない」

——創世記 第三章 二十二節

クリスは浮浪者も同然の男である。

乱雑に長く伸びた髪は後ろで結われ、着ているよれた白いシャツには微塵にも清潔感は見受けられない。今では一週間風呂に入らないなど当然のことであるし、一日飯にありつけなくとも少し運が悪かったただだと諦めることが出来る。それがこの男にはごく普通の日常なのだ。

しかし、クリスは別段職にあぶれているというわけでもない。彼は個人運営でタクシーの運転手をしている。

どういいうわけか山奥に廃棄されていたボロボロなビートルを発見し、その出会いを運命だとクリスは悟ったのだ。一目惚れとも言えよう。

それから、そのビートルを自身の手で直し、今のタクシー運転手という定職にありついたのであった。

そして、クリスは今その仕事の真っ最中である。

「……………」

大通りに面した海辺に愛車を停め、早三時間も経つだろうか。一向に客が乗り込んでくる気配はない。仕方がないので車を降り、自身の背を車に預け、眩しい太陽の光を眇めな

がら煙草を吹かす始末である。

——せめて一日の煙草代だけでも稼がなければ。

それがクリスの掲げる毎日の目標であり、毎日の生きる糧でもある。

しかし、あくびを数え両手の指で足りなくなる頃。クリスは嘆息を洩らしながら車内へ戻ることを余儀なくされる。

今日はついていなかった。いつものことだ。それだけのことである。なんのことはない。そう自分を慰めクリスは車のキーを回そうとした。

そこで初めて、ある異変に気がつくのだ。

バックミラー越しに車の後部座席へ座る一人の少女の姿が見える。綺麗な黒い髪に、人形が来ているような黒いドレス。頭につけている大きな赤いリボンが特徴的だった。

クリスはこの少女がいつ車内に入ってきたのか訝しげに思いながら、少女に話しかけた。

「どちらまで？」

少女は淡々と答える。

「世界の果てまで」

クリスは勢いで後部座席へと振り返り、そしてまた正面へと向き直る。クリスは少し肩

を疎める様な仕草をして、眉間に皺を寄せた。

「残念だったな、お嬢ちゃん。世界に果てがないってのは五百年も昔に“イタリア生まれのドンキホーテ”が証明してるんだ。さあ、とつとと降りろ」

しかしどういいうわけだろうか、クリスの冷たい言葉にも動じず少女は降りる素振りをみせない。

業を煮やしたクリスは怒号をぶつけようと後部座席へ振り返る。

——そこには開かれたアタッシュケースがあり、突き出されたソレにはクリスの人生が十回あっても稼げないような大金が入っていた。

「どこまで行ける？」

クリスは剥き出しにしていた怒気を引っ込め、正面に向き直り淡々と答える。

「……世界の果てまでは無理だが、世界を七週程度は出来るだろうよ」

クリスは煙草に火を点け、キーを回し車を発進させた。

あてもなく走らせる車に運転も飽き、クリスは少女へ話しかける。

「俺はクリスって言うんだ。お前、名前は？」

少女は答えない。

「家出か？ その大金はどこから持ってきたんだ？」

少女は答えない。

クリスは苦虫を噛むような顔を浮かべ、しけもくの煙草に火をつける。

バックミラー越しに少女の様子を伺う。少女はただただ窓から外を眺め続けるだけで、こちらのことを気にする風でもない。厄介な荷物を乗せてしまった。クリスは深い嘆息を洩らす。

しかし、ふと少女の傍らにあるものがクリスの目に留まった。これだ、そう思いクリスは少女に今一度話しかける。

「そのクマの人形はお気に入りか？ それ、デイベアだろ。名前とかあるのか？」

少女はまたしても口を開かない。

もうお手上げだ。クリスは少女とのコミュニケーションを諦め、煙草の火を消し、カーステレオへと手を伸ばす。もともと荷物が喋るわけがない。クリスはそう思うことにした。

「——アンジェリカ」

カーステレオをいじるクリスの手が止まった。確かに、虫ほどの小さな声であったが、後部座席から声が聞こえたのだ。

クリスは一瞬逡巡した後、深呼吸を一つ、そしてその声に答えた。

「……そうか、そのクマの人形はアンジェリカっていうのか。いい名前じゃないか」
しかし、少女は静かに首を振る。

「違う。アンジェリカは私の名前。この子はジェシカ」

クリスは思わず呆気にとられた。だが、すぐ我にかえる。

「そう、か。アンジェリカに、ジェシカか。わかった、もう覚えたよ」

そこからお互いの会話は途切れる。居た堪れない空気が車内に立ち込め、それでも車はあてもなく進んでいく。

街を一周するころには陽も暮れ、辺りは街頭の光が目立つようになる。

クリスも流石にこの先の見えない小旅行には食傷気味だった。

どこかないものか。とにかく気を休めるところに行きたい。クリスは散々考えあぐねる。
そこでハッと名案が思い浮かんだ。

車はクリスの気持ちを反映するかのようにエンジンが咆哮し、狩り立つ百獣の王のよう

に目的地へと走りだす。

そして、辿り着いたのは小さなレストランバーである。

「腹減っただろ？ 美味しいもんはねーけど、値段は手頃でな。食いたいモノを食え。もちろんお前の金でだが」

アンジェリカは先に車から降り、ただぶっきら棒に「甲斐性のない男ね」と言い捨て店へと向かい歩いて行く。クリスはまた苦虫を噛むような顔をして、肩を竦める。それから、アンジェリカの後を追うように店へと足を運ぶのであった。

「――ああ？ クリスじゃねーか。うちは金を持ってない客はお断りだ。さっさと帰んな」

シッ、シッと手を振り追い返そうとする店員にクリスは上機嫌な言葉で返事を返す。

「おいおい、なんだ？ ダニエル、お前が信仰する神様は隣人を愛せって言ったんじゃないかったか？ こりゃ今頃神様も泣いてるぜ」

ダニエルと呼ばれた店員は無愛想に答える。

「隣人つてのはな、てめえみたいな恩を仇で返すような馬鹿野郎のことを言うんじゃない。文句があるなら今までのツケ返してから言いやがれ」

「ハッハー！ いいぜ？ 今までのツケを三倍で四倍にでもして返してやるよ」

クリスはそう言いながらサムアップした手を右に向け、アンジェリカのほうへ指さす。

その指の先を見たダニエルは、青ざめた顔で叫んだ。

「まさか、お前……！　人さらいなんてやってるんじゃない！」

「馬鹿なこと言うんじゃないやねえよ！　俺の客だ、客！」

大慌てするクリスの横で、アンジェリカが静かに口を開く。

「ダニエルさん、彼が言ってることは本当よ。この男が言うことなんて信じられないのは私でも理解できるけど、今回は本当よ」

「お前なあ……」

「ハッハッハ！　こりゃあいい。お嬢ちゃん、いい洞察力だ。君を信じよう。もう少し大きくなったらまたうちに来な。美味しいウイスキーをたらふく飲ませてやる」

「ええ、とても楽しみにしてるわ」

アンジェリカはそう言ってニコリと笑ってみせる。それを見てダニエルもガハハとまた大きく笑う。仲の良い事だ、そんな事を思いながらクリスは呆れながら肩を竦め、嘆息を洩らした。

「ほら、メニュー表だ。なんだって頼め、俺が腕を振るって作るぜ」

アンジェリカはダニエルから渡されたメニュー表を凝視する。レストランとは言え、や

はりバーだ。メニューの半分以上は酒の名前で埋め尽くされている。その片隅に小じんまりと鎮座する料理たちはアンジェリカにはあまり馴染みのない名ばかりだった。

「……なにが美味しいの？」

「そりゃあ、我が国ご自慢のフィッシュアンドチップスカミートパイか。ダニエルに頼めばメイドの釜茹でスープなんかも出てくるかもしれないぞ」

「出すかよ、んなもん。テメエは横でマーマイトでも舐めてろ。お嬢ちゃんにはパンとローストビーフを持ってきてやるよ。遠慮無く食っていきな」

そう言つてダニエルは厨房へと潜つていった。

そうして、残された二人は押し黙る。話すことがない。ましてや、この少女と自分とは一回りや二回りも歳がかけ離れているだろう。一致する話題などあるわけがない。クリスはそう自身を納得させ無口を貫く。

しかし、耐え切れなくなつたクリスが口を開いた。

「お前、家出してきたのか」

「アンジェリカ、もしくはアンジェ」

「……アンジェリカ、お前は結局家出をしてきたのか」
少しの間を置いてアンジェリカはその質問に答える。

「——そうね、その通りだわ。とても窮屈だったの、家にいるのがね。だから飛び出したの」

アンジェリカは淡々と自分の身にあったことを語る。

歌手として人気を馳せていた母は幼少の頃に死んでしまったこと。今は義父に育てられていて、本当の父親は行方不明なこと。それ故に肩身が狭いこと。誰も、頼る人がいないこと。

それを黙って聞いていたクリスは、アンジェリカの話が終わると自分の手をアンジェリカの頭の上へと乗せ、出来るだけの優しい声色でアンジェリカへ話しかける。

「行くか、世界の果てまで」

アンジェリカはなんだか恥ずかしくなり、そつぽを向きながら答える。

「せ、世界に、果てなんか無いんじゃないかったの」

「無いなら作ればいい。お前が果てだと思えばそこが世界の果てだ。行こうじゃねえか、そこまで」

なにそれとアンジェリカは頭の上に乗せられたクリスの手を払いのける。そして、そつぽを向いたまま頬を赤らめるのであった。クリスは苦笑いをして、それを眺めた。

「あ、」

ここでハッと気づく。クリスはアンジェリカにひとつ重要なことを聞いておかなければならなかった。これは今後、自分に降りかかるであろう災厄の行方を知るための“重要な案件だ”。

「ところで、アンジェリカ。結局お前のその金は一体どこから——」

その矢先だった。店の入口の扉が乱暴に開かれる。店内にいる皆すべての視線がそこに集中する。見れば物騒な格好をした男が三人。クリスの勘はドンピシャだった。

——警察だ。

そこへ調度良く厨房から出来上がったばかりの料理を運んできたダニエルがみるみると顔色を変え、手に持つ料理の乗った皿を床にガシャリと落とす。

「クリス……！ やっぱり teme エ人さらいやってたのかッ!？」

ダニエルの怒号と共に、警官たちが叫び声を上げた。

「あの男を捕らえよ！」

クリスは弁明しようと思ったが、この状況を打破出来るほどの言い訳があるようには到底思えなかった。クリスはアンジェリカの腕を掴み、急いでこの場から逃げ出そうとする。

しかし、アンジェリカはクリスの腕を振り払い、ゆっくりと立ち上がってから冷静にもの言う。

「アナタ、人さらいだったの？」

クリスもゆっくりと立ち上がり、厭味ったらしくアンジェリカへ答えた。

「ああ、どうやら。おかげさまでな」

そこからのクリスの行動は早かった。

「きやあっ!? な、なにを——」

クリスはアンジェリカをお姫様抱っこするように抱え、一目散に店の出入口へ飛び込んでいく。

警官たちはそれを食い止めようと両手を広げ身構えるが、存外にクリスの力が強い。警官たちはそのまま体勢を崩し、クリスを店の外へと逃してしまった。

外に出たクリスはドタバタと踊るように相棒の車内に駆け込み、抱きかかえていたアンジェリカを放り投げるようにして助手席へ座らせた。

そして、キーを差し込みギアを入れ、フルスロットルで車を走らせる。

「わっ、わっ！　ちょ、ちよっとっ!!」

車は大きく揺れ、ロードオの如く飛び跳ねる。傾斜のキツイ坂道を一気に下り、ますますスピードを上げていく。その後を複数のパトカーが追尾弾のように追いかけてくるのだ。

クリスはカーステレオのスイッチを入れ、煙草に火をつける。空気を読まない陽気なラ

ジオの『は、これまた場違いなロッケンロールをクリスたちに届ける。

なんだろう、アンジェリカはこんな状況をどこかで見たような気がした。そして、ソレをすぐに思い出した。

「まるでトムとジェリーだわ……」

一方、クリスのほうはなにかが吹っ切れたのか笑い声を上げ叫ぶ。

「こちららポルシェ博士が作った息子に乗ってんだぞクソツタレがっ!! ターボもついてらあ! 追いつけるもんなら追いついてみるってんだ!!」

クリスは街中を縫うように右へ左へとハンドルを切る。その度に車はギヤリギヤリと軋んだ音を立てて尾を振る。

「……ねえ、この車大丈夫なの?」

「ああっ!? 今なんか言ったか? こっちは今アイルトン・セナに挑戦してんだ、大人しく座ってろ! あと、ちゃんとシートベルトもつけろ!」

そして、急カーブ。車体と共に横に揺られるアンジェリカは、ムスツとした顔を浮かべてクリスの言うとおりシートベルトを締めて、大人しく座り直した。

しかし、サイドミラー越し後ろの状況を見てるとなんだかアンジェリカ自身も楽しくなってきた。どんどん、どんどんとパトカーたちを引き離していく。窓を見ると風景が矢の

ように吹っ飛んでいく。確かに、これはなんとも痛快だ。このまま、どこまでも、どこまでも、行けそうな気がしてくる。

「クリス、このままどんどん飛ばしちやって！」

「お？ おおう！ 任せろや!!」

クリスは言われるがままにアクセルを踏み込む。呼応してエンジンはブウオンと荒々しい咆哮を上げる。

ああ、久しぶりだ。こんなにも心から楽しいと感じたのは。

アンジェリカの顔には自然と笑みがこぼれた。

夜空に浮かぶ月は三日月で、街灯が辺りを仄かに照らす。

クリスのタクシーはやっとの思いで警官たちの追っ手をまき、街と街との境まで逃げこむことが出来た。

一安心したクリスは車から降り、煙草に火をつける。アンジェリカも車から降り、クリスの姿を見て、「臭いからやめてよ、それ」とつぶやいた。クリスはアンジェリカを睨むが、やがて諦めたかのように嘆息をひとつ吐き、煙草を地面へ落とし火種を足でもみ消す。

さて、これからどうしたものか。クリスは物思いに耽る。

とんだ災難に巻き込まれたと自身の運命の憂いながらも、ここまで来た以上もう引き返すことは出来ない。晴れて明日には名譽たる見出しを引っさげて朝刊に自身の名が載るであろう。馬鹿馬鹿しい話だ。クリスはなるようになれと投げやりに考えることをやめた。

ここでふと気づく。クリスは恐る恐るアンジェリカにそれを尋ねた。

「アンジェリカ、お前金はどうした。金の入ったアタッシュケースだ」

「……っ!」

クリスのその言葉にアンジェリカは今までに見せたことのない反応で驚き、そしてバツの悪そうな顔をしてから申し訳無さそうに口を開く。

「あそこのお店に、全部置いてきちゃった……」

クリスはそれを聞き夜空を仰ぐように大きく両手を広げ、それから頭を抱えた。

「……ねえ、怒ってる？」

車内に戻った二人はしばらく呆然としていた。しかし、そんな事にも飽きたクリスは運転席のシートを後ろへ倒し、眠るようにして体を預ける。現実を見れば見るほど酷だ。ク

リスは目を閉じ、夢の国へのパスポートが発行されるまで羊を数えることに専念しようとしていた。

「別に、怒っちゃいねーよ」

アンジェリカにはクリスのそんな様子が怒っているように見えたのだろう。今にも泣き出しそうな声で、クリスの機嫌を伺ってきたわけだ。

だが、慔然としたクリスの返答にアンジェリカはますます縮こまる。アンジェリカは助手席で膝を抱え、ハムスターのように丸くなった。

これじゃ俺が悪者みたいじゃねーか。クリスは心のなかで嘆息を洩らした。

そして、互いに押し黙る。車内には静寂が立ち込め、聞こえてくるのは外にいる虫虫の鳴き声とクリスの微かな寝息だけだった。

アンジェリカは唐突に名状し難い不安に襲われる。自分は本当に“あの家”を飛び出してきて正解だったのか。これから自分はどうなってしまうのか。考えれば考えるほどに、不安の濃度は増していく。

そんなアンジェリカを脅すかのように、夜空に浮かぶ月はシニカルな笑みを浮かべていた。

アンジェリカは運転席のほうへ目を移す。隣にいるこの人に、きっと私はとんでもない

迷惑をかけていることだろう。この人は私を恨んでいるだろうか。アンジェリカの顔がいよいよくしゃくしゃに歪んでいく。

——そこへ、口を開いたのはクリスだった。

「昔な、天使に会ったんだ」

アンジェリカは突然の声にびっくりと身体を跳ね上がらせる。クリスは起きていたのだ。

「聞きたいか？」

アンジェリカは少し戸惑ってみせ、やがて静かに頷いた。

「俺がまだ自分で右も左も決められなかったガキの頃の話さ。俺の生まれは内戦地でな、その時はちょうど鉛球が頭を掠めて死ぬか生きるのか瀬戸際だった。死ぬってものがまだよく分からなくて、それでも痛くて、苦しくて。多分涙をいっぱい流してた。そんな時に現れたんだ。その天使がさ」

話を聞きながら、アンジェリカは素朴な疑問で口を挟む。

「それって、羽が生えて頭に輪っかをつけたような？」

クリスは「いや、意外と普通の風貌だった。ただ、そこには場違いな風貌だったよ」と

答え、話を続ける。

「そいつが俺に言うんだ。『お前は選ばれた。生きたくはないか』ってな。ガキの俺にはそいつがなにを言ってるのかがよく理解出来なかった。ただ、この痛みを、苦しみを、どうにかしてくれる。それだけはなんとなく分かった。俺はとにかく頷いたよ」

「すると、その天使は“果物の実”を俺の口元に差し出して、ただ淡々と『食え』って命令してきてさ。俺は素直に従った。それは不思議な味だったよ、美味くはなかったな。だが、その実を口にした途端みるみると傷が癒えていったんだ。魔法のようだったよ」

クリスはふと気づいたかのようにアンジェリカへ「創世記は知ってるか？」と尋ねる。アンジェリカは「知らない」と答えた。それを聞き、クリスは話を続ける。

「で、その天使は俺に言うんだ。『お前は選ばれ、選んだ。そして、また大きな罪を背負ったのだ。お前には試練が付き纏い、その全てを許さなければならぬ』、そんな事だけ言って俺の傍から消えた。光の粒になって消えていったんだ」

「俺は夢でも見たものだと思った。でも、後々思い知ることになったんだ。その試練も、その実が俺になにをもたらしただのかも——」

クリスが話し終え、アンジェリカはどうにも腑に落ちない顔をする。クリスはそれを察し話をまとめる。

「ま、要はだな。俺に不幸話はいつも付き纏ってるんだよ。今更こんなことで凹んだり怒ったりもしない。だから、その、なんだ。さっきみたいな顔をするなよ」

アンジェリカはクリスの意図を汲み取り、途端なんだか恥ずかしくなってそっぽを向く。「なにそれ。そんな事を言うために周りくどい“お伽話”なんかしちゃって」

アンジェリカの頬は林檎のように赤く染まっていく。クリスはそんなアンジェリカを見て苦笑いをした。

それから少し落ち着いたアンジェリカは、どうやら文句を言いつつも気になったのだから、クリスへさきほどの“お伽話”の続きを求める。

「でも、さっきのお話。仮に信じるとして、その天使は何のために——」

そこでアンジェリカの言葉は途切れた。クリスも異変に気づく。

二人が乗るビートルは突然として眩いの光に照らされ、その姿があらわになる。気づかぬうちに複数のパトカーに包囲されていたのだ。

「ここで待ってる。動くなよ」

クリスはアンジェリカにそう言って一人車外へと出る。パトカーからも複数人の警官と、派手なスーツを着込んだ見慣れない中年風の男が一人表へと出てくる。

「パ。パ……」

クリスはギョツとした。念を押したのに気づけばアンジェリカも車外に出ているではないか。しかも、クリスの見知らぬ中年風の男へ向かつてパパと呼びかけたのだ。面倒くさいことになってきた。クリスはこの状況に辟易とする。

「ふん、下衆が。うちの可愛い娘をさらってどうしようと思ったのだ。金か？ あの小汚い店に私の金が大量にあった。どうせ事前に娘をたぶらかして金を盗み出させたのだろう。愚かな男だ。実に愚かだ。死んだ方がよほどまだ世のためになるう」

中年風の男が右手をゆつくりと上げる。それに促されるように警官たちが一斉に銃を抜き、クリスへ向ける。

アンジェリカは慌てるようにクリスの前へ出て叫ぶ。

「パパっ！ この人は関係ないわ！ 私が、私が……一人で、お金を持ちだして、家を出たの……」

「それは、本当か？」

そう言つて中年風の男はクリスの顔を伺い見る。クリスはさもありなんと肩を竦めながら静かに頷く。

「ふん、そうか。……では、アンジェリカ。これからどうするつもりだ？」

アンジェリカは質問の意図を汲み取る。そして、顔を伏せ、怯えるように答えた。

「謝るわ、パパ。ちゃんと、家に帰ります。パパの言うことだもの……」

「フハハハ！ そうだ、それでこそ私の娘だ！ お前は私の言うことだけを聞いていればいい。それがお前の幸せなのだ。さあ、こっちにおいで。帰ったらパパとまた遊ぼう」

その言葉にアンジェリカはまた大きく体を身震いさせる。それを見たクリスはアンジェリカの前に立ち、ここで初めて口を開く。

「あー、アンジェリカのパパさんよ。話を聞く限り俺はもう関係ないんだろ？ いやはや参ったぜ、あんた相当の権力の持ち主みたいだな。頼むからその傍にいる警官どもの拳銃を下ろすように言ってやってくれよ。それとあんたの娘をここまで運んできた運賃だ。結構高くついてるぜ？」

クリスの要求に中年風の男はにこやかに答える。

「ああ、そうだな。いやあ、悪かった悪かった。君には随分と迷惑をかけたようだ」
そう言つて中年風の男は右手を挙げる。

「撃て」

警官たちは男の命令のままに、クリスの身体を次々と撃ちぬく。

クリスは衝撃で後ろへと吹き飛び、そのまま地面へと倒れる。それを見たアンジェリカは声にもならない小さな悲鳴を上げた。

「ゴミは処理をしなくてはな。臭って仕方ない。アンジェリカも分かっただろう。今後の教訓にすることだ」

——そして、クリスが喋り出す。

「俺には嫌いな人間がいる」

その場にいる全ての人間が驚き、その身を固く強張らせた。

クリスはゆっくりとその場から立ち上がり、話を続ける。

「最初から両手両足がついている、両目が見える、両耳が聞こえる。そんな当然のことさ。

そんな“当然”を、さも“当然”のように押し付けてくる人間が俺は大嫌いだ。それが当然じゃない人間はどうしたらいい？ どう答えばいい？ その当然を目の前にした俺たちは誰を恨んで、誰に願えばいいんだ」

中年風の男はたじろぎ、警官たちへ口早に命令を促す。

「うう、撃てっ！ 撃て、撃て！ いいから撃ちまくれッ!!」

警官たちも最早命令の為ではなく、自身の防衛の為にクリスへ向かつて拳銃の引き金を引き続ける。だがそれも虚しく、警官たちは弾の切れた拳銃を静かに下ろした。

クリスはどんなに鉛球でその身を穿たれようと、もう倒れることは無かった。

クリスはゆつくりと歩き出す。その度に中年風の男はおぼつかない足取りで後ろへ引き下がる。そして、ついには尻もちをついて地面に転げこんだ。

クリスは一瞬立ち止まり、細々とつぶやく。

「お伽話ってな、意外と悲劇が多いんだぜ？」

そう言つて、クリスはまた一步、また一步と中年風の男の方へ歩みを進める。男は既に腰が抜けているようだった。まるで化け物でも見たかのような顔をして、目に涙を浮かばせる。

「か、金か!? それともその娘か!? どちらでも、いや、どちらともでもくれてやる! だから、だから、もうこの通りだ。許してくれえ……!!」

「許してくれ、ね……」

男の願いがクリスの心に届いたのか、クリスはくるりと反転し、元いた自分の車の方へと戻っていく。それから投げやりに中年風の男へと言ひ放つ。

「俺はアンタを許した。大体、別に許す許さないの話じゃないんだ。お互いの事情があつ

た。それだけだ」

クリスは車の運転席に乗り込むと、ドアを閉め、代わりに窓ガラスを開いた。

「後はアンジェリカ、お前の問題だ。お前が選べよ。別にお前のパパもお前に愛がないわけじゃないだろうさ。愛も様々さ。それとも、俺との約束を選ぶか。世界の果てに、連れて行ってやれるかの保証はないけどな」

クリスは車のヘッドライトを点け、エンジンを吹かす。そして、煙草に火をつけた。

その場に立ちすくんでいたアンジェリカはクリスの言葉を聞き、少しの間逡巡した。しかし、すぐに力の籠もった声でクリスに答える。

「その臭いの。やめてくれればアナタについていくわ」

クリスは面食らったようにぼかんと口を開け、それから肩を竦めアンジェリカに話しかける。

「そいつはちようど良かった。これが最後の一本だ」

クリスは一口、大きく煙草の煙を吸い込み、そして溜息混じりのその煙を吐き出す。それからその煙草を窓から投げ捨てた。

それを見たアンジェリカは、毅然とした態度でクリスの車の助手席へ乗り込む。クリスは運転席側の窓ガラスをゆっくりと閉め、ギアを入れてからクラッチを引き、アクセルを

踏み込んだ。

車は動き出し、アンジェリカの父親からどんどん離れていく。

アンジェリカは何も言わず、助手席側のサイドミラーで呆然と立ち尽くすその父親の姿が見えなくなるまで、見つめていた。

三日だ。あの事件から、あの街から離れて三日経っていた。

「どうしてこうなるのよ！」

「どうしてこうなったんだろうな……」

あの後、クリスは行くあてもなく延々と車を走らせていた。しかし、車のガソリンも無限に湧いてくるわけでもなく、ついに底を切らしてしまう。

しょうがなくクリスとアンジェリカは車から降りた。そこはただ延々と続く草原地帯だった。かろうじて道といえる砂利道を頼りに進むしか無い。

そして、やることは一つだ。二人は車体を後ろから身体を預けるようにして押し続ける。どうか近くに街がありますように、クリスとアンジェリカはすがる思いで心から願った。

「……ねえ、もうこんなオンボロ捨ててしまいましょーよ」

「はあ!? 馬鹿言うな! こいつは俺の大切な相棒なんだ! 今度そんなこと言ってみろ、その舌をペンチで引っこ抜いてやる!」

クリスは続けざまに声を荒立てて捲し上げる。

「大体、こいつは俺の商売道具でもあるんだぞ。その商売も助手席へどこぞの“レディ”が乗ってるんじゃないや出来やしねえ。子連れのタクシー運転手なんて聞いたことがあるかよ」それを聞きアンジェリカは口籠らせてつぶやく。

「そんなこと言ったって、しょうがないじゃない……」

クリスはそんなアンジェリカを見て溜息をつき、「俺が悪かった。今のは忘れろ」とアンジェリカに謝った。

気まずさから二人は黙りこむ。ただ黙々と車を押し続ける。先に耐え切れなくなったのはアンジェリカだった。空気を変えるためにクリスへ思いついたかのように話を振る。

「ねえ、聞きたいことがあるのだけれども」

クリスは生返事で「なんだ」と答える。

「アナタ、不死身なの」

クリスはその問いにしばらくは答えなかった。アンジェリカもなにか察したのか「別に言いたくなかったいいの」と話を打ち切ろうする。

しかし、クリスは少し逡巡した後、口を開く。

「あの“お伽話”の通りだよ。俺は天使に命を救われ、永遠の命を手に入れた」

「じゃあ、クリスはこの世界で最強ってこと？」

クリスは力なく笑った。

「そうでもないさ。飯を食わなきゃ腹は減るし、疲れれば自然とまぶたも重くなる。身体が傷つけば痛いし、俺だってアンニュイな気持ちになることだってある。そんなモノは最強だなんて言えないと思うよ。ただ死ななくて、そうだな、怪我の治りが他の人間より少し早い。それだけさ」

「それに——」とクリスは話を続けようとして、「いや、なんでもない」と話を打ち切る。しかし、アンジェリカはまだ話を続ける。

「ねえ、その天使の目的はなんだったの？　クリスを死なない身体にして、なにがしたかったのかしら」

クリスはその問いに答えようか迷った。だが、迷った挙句、重々しく口を開いた。

「……あの後、一度だけその天使にまた会うことがあったんだ。奴は俺にこう言ったよ。『お前は神になる男なのだ』ってな」

「……ふっ」

それを聞いてすぐにアンジェリカは吹き出した。腹を抱えて笑い声をあげる。クリスはその姿を見て、言ったことを後悔するかのように右手で頭をぼりぼりと掻き、そして大きく溜息をついた。

「ふ、ふふっ、クリスが、クリスが神様だなんてっ！　おかしいったらありやしないわ！　ふふ、フハハ！」

「うるせえ！　ホントに言われたんだからホントのことなんだ！　クソツタレ、この話はどうもう終わりだっ！」

顔を真赤にして憤慨するクリスを尻目に、アンジェリカはしばらく笑い続けた。

「ほら、俺も話したんだ。お前のこともなんか聞かせろ」

「わたしのこと？」

「そうだよ。世の中ギブアンドテイクだ。おもしろ恥ずかしいことでも暴露しちまえ。じやないと俺の気が収まらない」

「そうね……」とアンジェリカは腕を組み、逡巡するような仕草を見せる。

「大した話はないわね」

「はあ!？」

「本当のことよ。大した話はないの。あの家にずっと閉じ込められてから。毎日のように薄暗い部屋の中でテレビを見て、たまに綺麗なドレスを身にまといパ・パと遊んだり。そんな日々をずっと繰り返しただけだから」

「……学校には行ってないのか」

「行ってないわ。たまに家庭教師がうちに来てたくらいかしら。だから、友達と言えるものもないの。ね、大した話が出来そうにもないでしょう？」

そう言って彼女は小さく微笑む。クリスにはその微笑みがとても痛々しく感じ、ただ生返事で「そうだな」とだけ答えた。

それから互いに話すこともなく、ただただ見知らぬ道を沿って車を押し続ける。それは陽が登り切った頃から陽が暮れようとする頃まで変わらなかった。

夕空に宵の明星が煌めく。これはもう車の中でとりあえずは野宿になりそうだとクリスは心の中でそう覚悟を決める。そんな時だった。

遠くに街の光が目映る。

クリスは疲れきったアンジェリカへ興奮しながらも激励を飛ばす。

「おい！ 街が見えてきたぞ！ 街の光だ！ もうちょっとで美味しいもんも食えるだろう

よ！ ほら、頑張れ！」

言われたアンジェリカも「ふえ……？」と力ない声を洩らし、それから一間置いて目を輝かせた。

いよいよ陽が沈む。それでも、二人はようやく街の全貌がはつきりとわかる距離まで近づいていた。

「少し車の中で休んでろよ。ちよっと街の奴に車を運ぶのを手伝ってくれないか頼んでくる」

クリスはそう言い残してから、走って街の方へ向かっていった。

ほどなくして、クリスは一人の街人と一台のレッカー車を連れてアンジェリカが待つビートルの方へと戻ってきた。

クリスのビートルはレッカー車に繋がれ、ゆっくりと、しかし人が後ろから押し運ぶスピードとは比べ物にならない速度で街まで運ばれていく。

クリスとアンジェリカはレッカー車の助手席に座らせてもらい、やっとの思いで街へることが出来たのだった。

「ありがとう、助かったよ」

「いやいや、礼には及ばないよ。こちらで大歓迎さ」

街へ降り立って、まずクリスはここまで車を運んできたくれた街人へ感謝の言葉を送った。

それにしても、ラッキーであつた。彼はこの辺りで車の修理業を営んでいるらしい。この街では評判が良いようで、クリスも聞きまわってすぐに彼の店へたどり着いたのだ。この人になら、任せても良いだろう。

「じゃあ、うちの車は任せた。金はさっき話してくれたレストランに持ってきてくれればいいよ。そこで待ってる」

「ああ、分かったよ。じゃあ、またあのレストランで」

そう言い残し、街人はクリスの車を繋いだレッカー車を運転しながら遠くへと消えていく。
「……………」

なにか、クリスの会話に違和感を覚えた。アンジェリカはクリスへ不思議そうにその理由を聞く。

「ガソリンを入れてもらうのよね？ だったら、私たちはお金を貰うほうじゃなくて、お金を払う方なんじゃないの？」

その質問にクリスは淡々と答える。

「売るんだよ、あの車。大体俺たちのどこに払う金があるってんだ」

「……………うん？」

アンジェリカは一瞬、クリスが何を言っているのかが理解出来なかった。しかし、クリスの言ったことを何度も何度も頭のなかで反芻していくうちに、その顔を驚愕の色へ染めていった。

「う、え、ううう売っちゃうの!? 相棒で、商売道具なんじゃなかったの!」

クリスはその言葉を聞いて、ゆっくりとしやがみ込みながら頭を抱える。

「俺だって、俺だってなあ……売りたかねえよ。クソう、くそう……」

クリスは未練たらしく、少し涙声だった。

アンジェリカはどこか申し訳なささと慈悲の心が芽生え、自分もしやがみ込みクリスの背中へ慰めの意味を込めて片手を添えた。

しかし、クリスはすぐに立ち上がり毅然とした態度で拳を握る。

「いつまでも落ち込んでもいらねえ。売っちゃったんならまた買やいいんだよ。よし、レストラン行くぞ、レストラン」

クリスは足早に歩き出す。アンジェリカはその背中を見つめ、少し笑ってから、後をつ

いていく。

レストランに着いた二人は各々食べたいものを注文する。

元いた街から離れ丸々三日だ。この二人はその三日間にまとな食事はとっていなかったと言っても過言ではない。そんな二人にはまさにここは天国そのものだった。

注文した料理を瞬く間に腹の中へ入れ、そろそろデザートかという頃合いに、先ほど別れた例の街人が現れた。

クリスは店の入口に立つその街人へ手を振り、こっちだと自分たちの座るテーブルの方へと招いた。

「ここのレストランは気に入って貰えたかい？」

「ああ、最高だね。三食ここでも良い。まあ、そんなことは置いといてだ」

コホン、とクリスはわざとらしく咳払いをする。

「それで、いくらになったんだ。俺の“元”相棒は」

「ああ、それならここに——」

実はなんだかんだと言いながらも、クリスは非常にワクワクしていた。自分の愛車がどれほどの価値を持っていたのか。それが今分かるのだ。

街人は袋に入ったお金をクリスに手渡す。そして、少しだけ申し訳無さそうに言うのであった。

「まあ、正直に言うと、もうあの車は“側”だけだ。むしろ、びっくりしたよ。あんな純正でもないパーツをよりあわせて今まで動いていたんだろう？ 君は良いメカニックになれるかもしれない」

クリスはその言葉を聞きながら悲しそうな目で金の入った袋を見つめる。そして、諦めたかのように小さくつぶやいた。

「ああ、ありがとう。メカニックか、考えてみるよ……」

「じゃあ、僕はこれで。また車を買うような事があれば僕のところへ来ればいいよ。安くしとくからさ」

そう言って街人は手を振りながら颯爽と店を出て行った。

アンジェリカはデザートのジェラートを頬ぼりながらクリスに聞く。

「いくらぐらいになったの？」

クリスは放心状態で店の天井を見つめながら答えた。

「お前が今頼張ってるジェラートをすぐにでもキャンセルして、スーパ―に売ってるラクトアイスでも与えとけば良かったなって思えるくらいの値段さ」

「ふーん、そう。でもこのジェラート、とっても美味しいわ」

「そりゃ、良かったな……」

淡々と言つてのけるアンジェリカを横目に、クリスはいつものように、大きく溜息をつくのであった。

しばらくしてから、クリスたちはそろそろ店から出ようと会計を済ませることにした。そして、クリスにまたもや悲劇が訪れる。

「クソツタレ、こんなに高いだなんて聞いてねーぞ!!」

アンジェリカはそんなクリスを尻目に、「またここに來たらいいな……」と心のなかでつぶやいた。

クリスたちは店を出て、すぐに宿を探した。最初に見つけた宿がとても手頃な値段（しかし、あまりにも酷い体裁の宿はある）で、クリスはアンジェリカの意見も聞かず即決の判断を下した。

階段を登り、宿主に招待された部屋はボロボロで、風が吹くと悲鳴を上げる窓とベッドとソファアがひとつずつ、後はアンティークとは聞こえが良い棚に年代物のブラウン管テレビが置いてあるだけの質素な室内だった。

宿主が店のカウンターへ帰るとクリスはすぐにソファへ倒れこんだ。

アンジェリカは部屋を見回しながらクリスに聞く。

「ねえ、お風呂は？」

「考えるな。寝ろ」

「ぶー……」

アンジェリカは諦めて言われた通りにすることにした。着ていた服を脱ぎ、下着姿でベツドに潜り込む。

室内はとても静かだった。あえて、聞こえてくるものを列挙するとしたら、クリスの寝息。そしてどこからだろうか、時計の針の音がカチリ、カチリと聞こえてくる。あとはたまに悲鳴を上げるガラス窓。その程度だった。

少し時間が経ち、アンジェリカは「もう寝た？」とクリスへ問いかける。返事はない。アンジェリカは少し考えたのち、独り言のように喋りだす。

「——あのね。私、後悔はしてないの。アナタとこうやって街を飛び出したことに。そう、このたった数日のことよ。それでも、変わったの。何もかもがね。すごく嬉しいの。すごく、楽しいの」

「確かに大変なこともたくさんあったわ。このたった数日のことで。でも、そのたった数

日・の・こ・が私にはどれも新鮮で、輝いてて。だって知らなかったわ。車で眠ると背中が痛くて悪い夢を見ることとか、ずっとシャワーを浴びていないとこんなにも身体がベタベタになって落ち着かないこととか、“アナタ”のような人がいることとか」

「でも、生きてるって気がするの。この世界は私の知らないことでいっぱい溢れているの。それを感じられる今が、とても幸せよ」

アンジェリカはひと通り話し終わると満足したように「おやすみ、クリス」と優しくつぶやき、静かに寝息を立てはじめた。

——そして、クリスはアンジェリカに気付かれないように小さく鼻で溜息をつき、身体を丸めるようにして眠りについた。

翌日の朝。クリスはアンジェリカへ出かけてくると伝え、部屋から出ていこうとしていた。

「どこへ行くの？」

「仕事探しだよ、仕事探し。しばらくはこの街にすることになるだろうさ」

そう言ってクリスは部屋のドアを開けそそくさと出て行った。

ぽつーんと、アンジェリカ一人だけが部屋に残される。

することも思いつかないのでアンジェリカはベッドの上に座り、テレビの電源をリモコンでつけ、適当にザッピング。よく分からないニュース番組ばかりだ。それでも見ないよりはよっぽどマシと、それをぼーっと眺める。しかし、やはり暇だ。暇に殺されるんじゃないかという恐怖心さえも沸き立つ。

「……よしっ！」

アンジェリカは立ち上がり、急いで着替える。テレビの電源を切ってから、部屋を飛び出した。

それからドタバタと階段を駆け下り、そしてカウンターにいる宿主に「ちよつと出かけてきます！」とだけ伝え、ホテルの外へ。

急にどうしたのか、と聞かれればアンジェリカはこう答えるだろう。

「暇が嫌なら、楽しいことを自分で見つけにいけばいいんだわ」

かくして、アンジェリカは人生で初めての“お出かけ”というものに挑戦してみることになったのだ。

迂闊だった。こんなことで初めてのお出かけが失敗に追いやられるとは。

「お金がないわ……」

そう、アンジェリカにはお金が無いのだ。当然といえば当然のことなのだが。とはいえ、先にこの事に気づいていたとして、クリスにせびってお小遣いが貰えていたかと言われれば、間違いなく否だろう。

意気消沈しながらもアンジェリカは街中を歩きまわる。しかし、次第に気分も上がってきた。見渡せばどこもレンガ造りの建物ばかりでとても味のある街だ。綺麗な服屋に、オシャレなアンティークショップ。アンジェリカにとっては街中は物珍しい物ばかりでまさに宝箱。見ているだけで十分に面白いのだ。

そんな折、見つけたのは街角へ静かに佇むひとつの小さな喫茶店。

店内を覗き見ると、年配の女性店員が忙しくなく動き回っていた。ここでハッとアンジェリカはひらめく。

アンジェリカは一つの決心を胸に、店内へと入っていった。

その日の晩。クリスとアンジェリカの二人はホテルへ戻り、互いにベッドの上へ腰を掛けてぼんやりとテレビを見ていた。

アンジェリカはクリスへ話しかける。

「お仕事、見つかったの」

「……………」

「そう、よく分かったわ」

返事を聞かなくともクリスの顔を見ればすぐ分かる。どれだけの職場を駆けまわったのだろう。酷くやつれているようにも見える。きつとぞんざいな扱いでも受けたのだろう。

しかし、残念だ。そんなクリスをアンジェリカはもつとどんだ底に貶めてしまうことになる。とは言え、これは仕方のないことなのだ。そう、仕方のない、ことなのだ。

「私はお仕事、見つかったわよ」

その瞬間。

「はああああああああああああああ!?!」

クリスは驚きのあまり悲鳴にも似た叫び声を上げた。

アンジェリカはしてやったりと勝ち誇ったかのようにニヤリと笑う。そしてベッドの上へと立ち上がり、小さな胸を張って高々と言うのだ。

「今日ね、一人で街をうろついてたら隅の方に小さな喫茶店を見つけたのよ。そこで、閃いちやったの！ お金がないのなら働けばいいじゃないってね！ だから、お店に入って店主のおばさんに直談判してみるとすんなり金を貰えちゃった。どう？ クリスも頼んで

みたら？」

言われたクリスは悔しさを隠せない様子で強がってみせる。

「は、はッ！ 喫茶店だと？ バカバカしい！ 『いらつしやいませ、お客様？ 本日は大変お日柄もよく、……本日のオススメ？ 自分で食うもんも決められねーのかこのストコドツコイ』、ここのなるのが目に見えるぜ！」

「いいか？ 俺は漢の中の漢だ。孤高で、クールな、ダンディなんだ。他人へ謙るような仕事なんて出来るかよ。だからこそタクシー運転手をやってたんだ。俺みたいな孤高で、クールな、ダンディにはピッタリの仕事さ」

アンジェリカはそれを聞き、呆れたような顔で言う。

「その孤高でクールなダンディさんは“相棒”を売っぱらっちゃってタクシー運転手を廃業されたのではなくって？」

クリスは一瞬虚を突かれて押し黙ったが、それでも反論する。

「廃業は、してないさ。一時休業だ。相棒は……、そう、俺は孤高で、クールで、ダーティーなんだ。自分の生活のためには長年寄り添った相棒だって売りに出す。だが、俺はいつか相棒を迎えに行くからな。必ずな！」

そして、訪れる冷ややかな静寂。

なんともアホくさい。アンジェリカは心底どうでも良さそうに「あら、そう」とだけ答え、ベッドへ座り直しブラウン管を眺める作業に戻った。

そんなアンジェリカを見てクリスは溜息をひとつつき、同じようにベッドへ座り直してからテレビを眺め、うなだれるのであった。

翌日。アンジェリカは例の喫茶店に来ていた。クリスを連れて。

「どうして俺がついてこにやいかんのだ」

「そりゃ、挨拶は必要でしょ？ “お父さん”」

クリスはわけが分からず「はい？」と素っ頓狂な声を上げる。

そんなところへ、ウェイトレス姿の女性が二人の方へと近づいてきた。

「アンタがアンジェリカの“父親”かい。話に聞いた通りうだつの上がらなさそうな見た目だねえ」

「なんだと!？」と噛み付こうとするクリスの背中をアンジェリカが思い切りはたく。

アンジェリカは取り繕うように店主の女性へと話しかけた。

「ええ、全くその通りですわ、ナオミさん。このどうしようもないポンコツが私の父親です」

また反論しようとするクリスへアンジェリカはキツと睨みをきかせ黙らせる。

「では、パパ。自己紹介を」

打って変わってアンジェリカは満開の笑顔を咲かせ、クリスへ自己紹介を促す。

「は？　なんで俺がそん、……します」

クリスは戦慄とした。アンジェリカの表情だ。確かにアンジェリカは笑ってはいるが、その裏には禍々しいほどの負の感情が含まれている。クリスには、それが分かる。

はあ、と溜息を一つ。クリスはしぶしぶ自己紹介を始める。

「あー、その、私がアンジェリカのパパをやっているクリストファーです。愛称をこめてクリスとお呼びください。いやあ、こんなちんくりんがお店のお役に——」

「痛っ、叩くな！　分かった！　分かったから！　あ、いや、だから、うちの可愛い娘がですわハハハ。こんな素敵なお店で雇っていただけるだなんて光栄の至りです、ええ」

引きつった笑みを浮かべながら自己紹介を終えたクリスを見て、店主のナオミは肩を竦める。

「そりゃ、こんな男だと女にも逃げられるわけだよ。奥さんに逃げられ、職も失い、夜逃げ同然で元いた街から飛び出して来たんだって？　親を選べないのはツライわね、アンジェリカ。まったく、しつかりなさいよ、“クリス”」

「……お前、この人に何を吹聴したんだ」

「さあ？ 何かしら」

クリスはぐったりとうなだれる。よくもまあ、ここまでの嘘八百を並べられたものだ。少し感心すらする。最近やっと分かってきたが、このアンジェリカという娘は中々に頭がキレる。

もうお好きにどうぞと、クリスは黙ってアンジェリカの父親を演じることにした。

そして、アンジェリカは出来るだけの満面な笑みを作り、ナオミに言う。

「こんな父親ですが、その、悪い人ではないのです。そして、こんな父親の助けに少しでもなりたいと思ったんです。ナオミさん、きつとご迷惑をおかけするとは思いますが、わたし一生懸命働きます。どうか、よろしくお願いします」

その途端、ナオミはアンジェリカを優しく抱きしめた。

「ええ、任せなさい。困ったときはお互い様よ。私はアナタを家族のように歓迎するわ。ま、しょうがないからそのボンクラもね」

クリスはもう反論する気にもなれず、ただ溜息を洩らす。

ナオミが「それで？」と話を切り出してきた。

「アナタはどうするの？ クリス」

突然飛んできた質問にクリスは慌てるが、その意味を汲み取り答える。

「俺は……見ての通り、不器用な男だ。喫茶店だなんて務まらねーよ。直ぐにでも他の当てを見つけるさ。だから、……アンジェリカを頼む」

その答えにナオミは満足したのか、頬を綻ばせ「勿論だとも」と胸張ってみせる。クリスは自分の言ったことがなんだか恥ずかしくなり、そっぽを向いた。

ナオミは抱きしめるアンジェリカをそっと離して、「さて」と腰に手を当てる。

「じゃあ、アンタたちの歓迎祝いだ。この店の屋根裏部屋をアンタ達に

」。あげるよ。ホテル暮らしをしているんだろう？ そんなんじゃないつか金が尽きちゃうよ」

クリスが驚いたように声を上げる。

「おいおい、いいのか？俺たち初対面みたいなもんだぜ？信用してもらえるのは嬉しいが、……ホントに？」

ナオミはやれやれと両手を上げて肩を竦める。

「馬鹿かい、アンタ。あたしや言ったはずだよ。『家族のように歓迎する』ってね。まあ、その代わりひとつ条件がある」

クリスは息を呑んだ。やはり、美味しい話の裏にはそれなりの代償が求められるのだ。

「条件ってなんだ」

ナオミは少しの間をあげ、ニヤリと笑いながら言っただけ。

「次にこの店へ来るときはただいまって言いな」

「……はあ？」

ナオミはガハハと笑い、クリスは拍子抜けしたかのように肩を竦めた。

その翌日から、アンジェリカはナオミの喫茶店で働くことになった。ホールの店員として注文を聞いたり、コーヒーを運んだり。そんな仕事内容だ。

変わって、クリスは足繁く、様々な職場を回っては働けないかと聞きまわっていた。しかし、クリスのなにかが癪に障るのだろう。毎度のこと最終的には一蹴されてその場から追い出される。

それでもクリスはアンジェリカに負けじと、半ば子供染みた悔しさを覚えつつ、日雇いの土木業などで金を稼いでいた。

お互いに仕事が終わるとナオミから借りた屋根裏部屋で今日あった出来事を話しあったりする。

アンジェリカは楽しそうに話し始めた。

「今日はね、ナオミさんの娘さんと一緒にお仕事をしたのよ！ ルツちゃんって言う子なの。私より二つ年下らしいけれども、とっても賢くってとっても可愛らしいの。それでね、私たちお友達になったの！ 私、恥ずかしいけれども友達だなんて初めて出来たわ。とても、とても嬉しいの」

クリスはいいつもまだまだ子供なんだと心のなかで苦笑いしつつも、アンジェリカの頭を優しく撫でてやった。

「そうか、良かったな。お前ならそのうちいっぱい友達が出来るさ。この先、きつとツライこともあるだろうが楽しいこともいっぱいある。ワクワクしてきたろ？」

「ええ、とっても！ 私、やっぱりクリスに感謝しないといけないわ！ こんなにも外が楽しいことに満ち満ちているだなんて！」

そんなことを言われるとクリスも少し気恥ずかしい。だが、言われて嬉しくないわけでもない。クリスは照れ隠しをしつつもアンジェリカに答える。

「明日もきつといい日になる。もう夜も遅い、そろそろ寝るんだ」

クリスから言われた通り、アンジェリカはベッドに潜り込み目を瞑る。そして、小さくつぶやいた。

「ありがとう、クリス。おやすみなさい」

クリスはひとつ嘆息をつき、「おやすみ」と優しく言葉を返した。

二人がこの街に来て、すでに一週間が経とうとしていた。

クリスは相も変わらず定職が見つからず途方に暮れていた。

そんなクリスは街の海岸線にある埠頭でぼーっとしながら座り込み、勿論アンジェリカには秘密で、煙草を吹かしていた。

そこへ背後から一人の来客が現れる。クリスはその来客のことを見向きもせず、言葉だけを投げかけた。

「――煙草、一本いるか？」

その来客は厳かに、淡々と答える。

「それは墮落した者が咥えるモノだ」

「そうかい」とクリスもまた淡々と答え、煙草をゆっくりと燻らせながら海を眺める。

波は穏やかで、潮風が心地良い。しかし、やがて身体に纏わり付くその潮風に、クリス

はなにか不穏なモノを感じつつあった。

煙草の火種がフィルターまで差し掛かる頃、クリスは仕方なくその来客へ話しかけた。

「久しぶりだな。何の用だい、“天使”さんよ」

クリスに天使と呼ばれた男は答える。

「神からの預言を貴様に与えに來たのだ」

クリスは煙草を地面に押し付けるようにして火種をもみ消し、初めて天使のほうへと向く。

「今度は俺をどうするつもりだ？ イシュマエルの称号でもくれるのか？」

天使はクリスの言葉など気にも留めず、話を続ける。

「貴様には常に試練が付き纏う。それは抗えない運命で、始めから決まっていることだ。貴様は全てを許す存在へと昇華しなくてはならない」

「――娘だと、気づいているのだろう？」

その言葉にクリスは目を見開き、息を呑む。潮風が纏わり付いた肌から、じわりと冷たい汗が流れ這う。

「なにを、言ってるのかよく分からないな。俺に娘なんていない」

「いや、いるはずだ。そして、貴様は気づいている。あの娘の名や、あの娘が語った母親のこと。すべてが偶然だと思っているのか？」

「——やっぱり、そうなのかよ。だろうな。お前の言うとおりだ、確かにうすうすは思ってたよ。だが、信じたくはなかった。……サラは、死んだのか」

「ああ、あの娘の母親は他界した。あの子は独りだ」

「違う！ アンジェリカには、俺がいる。独りなんかじゃない」

「いずれは独りになる。それは貴様とて同じことだ」

クリスは黙りこむ。しかし、クリスは突然立ち上がり、持っている煙草の箱を勢い良く海へ投げ捨て、天使へ哀願した。

「頼む！ この通りだ！ アンジェリカだけは巻き込まないでくれ！ どんな試練だって俺は受け止めてみせる。お前の主に言われりやこの場で狂人のふりだってしてみせるさ！ だから、だから……、お願いだ。アンジェリカを、巻き込まないでくれ……」

「それは、我が主の決めることだ。貴様が決めることでもなく、私が決めることでもない」

クリスは膝から崩れ落ちるようにして地面へと座り込む。

天使は言う。

「近いうちに貴様へと試練が与えられる。身の振り方を自身で決めるのだな」
クリスはなにも答えない。

それを見た天使はクリスに背を向け、その場から消え去ろうとする。

その背中へ、クリスは最後に言葉を投げかけた。

「お前、俺のこと嫌いだろ？」

天使はクリスの方を見ず、答える。

「――ああ、大嫌いだ」

そう言い残し、天使は光の粒となって消えていった。

その日の夜。屋根裏部屋でクリスとアンジェリカは他愛のない話をしていた。

アンジェリカの話は、ルツと口喧嘩をしたこと。明日にはそれを謝りたいこと。どんな風に謝ればいいか悩んでいること。そんな内容だった。

クリスはそれを黙って聞いていた。そして、時々笑って励まし、アドバイスをしてやったりもした。

「ありがとう、クリス」

アンジェリカもどこか安心したようで、ベッドへ潜り込もうとしていた。

そこへ静止をかけるようにクリスが話しかける。

「おっと、アンジェリカ。……その、なんだ、寝る前にひとつ話がある」

「なに？ クリスも誰かと喧嘩でもしちゃったの？」

「いや、そうじゃないんだ——」とクリスは答え、アンジェリカが座るベッドの下から少し大きな紙袋を取り出した。

「これ、やるよ」

そう言っただけでその紙袋をアンジェリカの方へと放り投げた。

アンジェリカは訝しく思いながら紙袋の中身を確認する。そして、「わあ！」と歓喜の声を上げた。

「どうしたの、これ！ 大きなデイベア！」

クリスは少し恥ずかしそうに答える。

「プレゼントだよ。お前が前持ってたデイベア、——ジェシカの代わりだ。ダニエルの店に置いていったつきりだろ？ 大切にしてくれよな」

「でも、……どうして急に？」

クリスは言い淀む。しかし、直ぐにその場へしつくりくる言葉を見つけた。

「アンジェリカは最近頑張ってるからな。ご褒美があってもおかしくはないだろう？ 神様だってきっと笑顔で許してくれるさ」

アンジェリカはもらったデディベアを両手で宙に掲げ、人形と見つめ合いながら言う。

「そうね……そうよねっ！ ご褒美ぐらいあっても確かにおかしくはないわ！」

そして、アンジェリカはデディベアを抱きしめる。

「クリス、ありがとう。本当に、本当に——」

クリスはアンジェリカの異変に気づき、慌てふためく、

「お、おい!? どうしたんだよ！ なんで泣くんのだ!？」

アンジェリカも戸惑うようにして涙目で答える。

「ど、どうしてかしら……ひつぐ、でも、わからないわ……涙が、涙がねっ、出るの……。多分、とても、嬉しいのっ、……とても、とっても……」

何かの糸が切れたのだろう。ついにアンジェリカは人形に顔をうずめながらわんわんと泣き立て始める。ああ、この子はどれだけ強がって生きてきたのだろうか。どれだけの苦勞を強いられてきたのだろうか。どれだけ、辛い目に会ってきたのだろうか。クリスはふとそんなことを思う。

そして、クリスは優しくアンジェリカの頭を撫でた。

「そうか。良かったよ、喜んで貰えて。でも、泣き虫なのは感心しないな。ほら、笑って」
クリスは撫でる手をアンジェリカの頭からそつと離す。

アンジェリカは両手で涙を拭い、なんだかよく分からないグシャグシャな笑顔を作って
クリスへ答えた。

「……うんっ！」

翌日のまだ日が登りきらない早朝。クリスはアンジェリカ起こさないようにこつそりと
屋根裏部屋から出る。

階段をそつと降り、店のホールまで出ると間の悪いことにナオミと鉢合わせてしまった。
「おや、こんな朝早くからどこへ出かけるんだい」

「えーと、そう、アレだ。仕事探した。漁師も悪く無いと思ってな。今から直談判さ」
ナオミは不審に思いクリスを問い詰める。

「漁師ねえ。あまりアンタの柄じゃない気もするけど？」

不味い。クリスは必死にその場で言い訳を考える。

「いや、俺もだな、そう思うんだ。だが、しかし、そうも言ってもらえないだろう？ 仕事
を選んでも場合じゃないんだ」

「なら、うちの店で働けばいい。みっちりこき使ってあげるよ。それに、そのほうがアンジェリカも安心するだろう？」

クリスは言い淀んだ。しかし、諦めたかのように話はじめる。

「……大切な用があるんだ。それはもう、大切な、一大事だ」

「アンジェリカ以上にかい？」

「それは違う！ 違うんだ……。アンジェリカは大切だ。それは何よりも。でも、いや、だからこそ。行かなければならないんだ」

ナオミはしばらくにも言い返してこなかった。しかし、どこか遠くを見つめるような目をしてクリスに語りかける。

「——私の夫はね、立派な軍人だったよ。国のために使命を全うした。それは今なお私の誇りだよ。だがね、最後に見た戦場へ赴く彼の姿はね、今のアンタととても似ているよ。それでもアンタは行くのかい？」

クリスは顔を伏せ、ゆっくりと歩き出す。そして、店の出入口へ立って扉のドアノブに手を添える。

「……アンジェリカを頼む」

ナオミはクリスの背中を睨み、吐き捨てるように答えた。

「アンジェリカのことはきちんと私が面倒を見るよ。でもね、アンタの頼みだからじゃない。アンタの頼みなんて聞いてやるもんか」

クリスは扉を開き、小さくつぶやく。

「それでいいさ。頼んだ」

クリスは店から出て、朝もやのかかる街の中へと消えていった。

クリスはあてもなく歩く。既に街を出てから半日は過ぎていた。陽ももう少しばかりで暮れ出す頃合いだろう。

疲れた。クリスは突然、気力が尽き果てたようその場に仰向けになって倒れこむ。辺り一面に広がる草原の中にクリスは独りぼっちだった。なにもいない。誰もいない。

吹き抜ける風がクリスの頬を撫でた。このまま寝てしまおうか。そんなことを思ったりする。

「腹減ったな……」

クリスはナオミが作るビーフシチューを思い出す。次に蜘蛛が巣を張り、雨漏りもするが、それでも居心地がよかったあの屋根裏部屋を思い出す。そして、最後にアンジェリカ

の顔を思い出す。

既に気が滅入りそうだった。

少しでも忘れよう。そう思い、クリスは片腕で顔を覆い隠して眠る体勢に入る。

そんなクリスに、声をかける者がいた。

「……こんなところで何してるのよ、クリス」

クリスはその声に驚き、飛び上がるようにして上半身を起こした。そして、その人物を見て哑然と口を開ける。

「アンジェリカ、お前なんでこんなところにいるんだ……」

アンジェリカは手を腰に当て、少し怒った口調でその質問に答える。

「朝起きたらいないんだもの。ナオミさんに聞いたわ。ホント、勝手なんだから」

クリスは心の中であの女郎のビーフシチューを少しでも恋しく思った自分を呪い、深く溜息をついた。

そんな中、クリスはアンジェリカを見てひとつの異変に気づく。

「どうした、その膝。血が出てるじゃないか」

指摘されアンジェリカは少し恥ずかしそうに答える。

「……クリスを探し回ってたら転んじやったの。そこら中を走り回って探したんだから」

クリスはなんだかバツが悪くなり、「すまん……」とだけ答える。

「それで？」とアンジェリカは話を切り出した。

「どうして急にいなくなったりしたの？ 私、クリスになにか酷いことでもしたかしら？」
クリスは言い淀むように「いや、そんなことはない」と答える。そして、必死に言い訳を考えた。

「俺は——しようもない人間だ。アンジェリカの傍にいてもきつと良くないことにしかない。だから、離れた」

「なにそれ。意外と殊勝なのね。それに、とても臆病だわ。アナタが小さく見てるのは自分？ それとも私かしら？」

「違う！ そんな風にお前を見たことはない。ただ……、そうしなければいけなかった。分かってくれ、アンジェリカ」

アンジェリカはなにも言わず、クリスの横へとそっと座る。横並びに、二人は目の前へ広がる群青色の空を見つめる。草原に風が吹き抜け二人の肌を撫でる。ここにはなにもいない。誰もいない。いるのは独りのクリスと、一人のアンジェリカだけだ。

「クリス、私はね。アナタのことがとても好きよ。それがどんな好きなのかは、私にもわからないけれど。でも、クリスは私に世界を教えてくれた。小さな檻から私を連れ出して

くれた。とても感謝しているし、アナタをととても敬愛している。だからこそ、一緒にいたいと思えるの。それでも、ダメなの？」

「……ああ、それでもダメだ。俺はアンジェリカの傍にはいられない」

その言葉にアンジェリカは立ち上がり、痼癢を起こしたように言葉をまくし立てる。

「どうしてなの!? ねえ、どうして!? クリスは私のこと嫌いになっちゃったの……？」

私はアナタを家族だと思い、親友だと思い、愛する人だって思ってるわ！ ねえ、お願い。だから理由だけでも教えてよ。私は、……アナタの傍にいたいわ」

クリスはなにも答えない。顔を伏せ、押し黙るだけだった。

そんなクリスを見てアンジェリカは唇を噛み締め一筋の涙を溢す。そして、クリスに背を向け、ゆっくりとその場を去ろうとした。

その時だった。クリスが重々しく口を開く。

「アンジェリカ。お前はサラのことを、ママのことを覚えているか？」

アンジェリカはゆっくりと振り返る。

「ママのことを、知っているの……？」

クリスは暮れる陽を傍目で感じながら、ゆっくりと話始める。

「——サラと俺は生まれが一緒だな。同じ内戦地で育ったんだ。あんな環境でもサラと一

緒にいる時だけは何もかもを忘れて楽しむ事ができた。よく俺に歌を聞かせてくれたよ。綺麗で、どこまでも澄み渡るような歌声だった」

アンジェリカはクリスの横へ戻り、座り込む。黙ってクリスの話を聞いていた。

「俺たちが十六になる頃だったかな。サラの歌声は、その頃うちの村に来ていた行商人に買われてな。半ば強引に村からサラは連れ出された。それでも村の奴らは喜んでサラを送り出したよ。それを誇りだとも思っていた。だが、俺は引き止めることも出来ない自分の無力さが悔しくて仕方がなかったよ」

「だから、アレは覚えてる。十八の誕生日だ。俺は一人で村を出た。サラの居場所なんて知りもしなかったし、その時まで村から一歩たりとも出たことの無かった俺には外の世界が巨大な魔境のようにも感じられた。それでも、必死に探したんだ」

「そして、ついに見つけたの!？」

アンジェリカは夢中となってクリスの方へ身を乗り出す。クリスは少し苦笑いをして話を続ける。

「ああ、見つけたよ。半ばもう諦めかけてた頃にな。俺はストリートを夢遊病者のようにフラフラと歩いていたんだ。その時、不意にサラの歌声が聞こえた気がした。そして、それは気のせいじゃなかったんだ」

「——今思えば、どうして気づかなかったんだろうな。サラは歌声を買われて村を出て行ったんだ。それなら、クラブや音楽ホールを回って聞き込みをすればきつともっと早くサラのところまで辿り着くことが出来ていたと思うよ。つまり、そういうところでサラを見つけた。サラは本当に歌っていたんだ」

「サラが歌い終わって、ステージから降りてくると同時に俺はサラの元へすぐに走って向かった。サラはとんでもなく驚いてたよ。そして、俺たちはお互いの存在を確かめるように抱きしめ合った。本当に嬉しかったんだ。また出会えたことが」

クリスは思い出を反芻するように、遠くを見つめる。懐かしい、大切な記憶だ。

だからこそ、一つの決心を固め、また話を始める。

「それから、俺はサラが借りているアパートの一室で、サラと寝食を共にした。楽しい思い出だ。サラのショッピングに付き合ったり、サラ行きつけのレストランへ一緒に行ってみたり。あの時はレストランのマナーなんて知らない俺が大恥をかいいたな。それと、お互いに恋しくなって村の思い出なんかもしたりした」

「永遠にこの時間が続けばいいと思ってた。それでも、そんな時間が続いたのはたかだか数週間だけだった。サラの引越しが決まったんだ。俺はその時知りもしなかったが、サラは歌手として十分なほどの評価をその時点で得ていた。それで、大都市へ移り住み、彼

女はもっと大きなステージに立とうとしていたんだ」

「勿論、俺もついていこうとした。だが、俺は再会してしまったんだ。あの“天使”に。奴は俺に言った。『お前はあの女を不幸へと陥れるだろう』ってな。ついに、俺はその預言めいた言葉の恐怖から逃れられることが出来なかった。だから、俺はサラから離れることにしたんだ」

「そして、サラと別れる最後の日に、俺はサラと交わった。その結果として生まれたのが——アンジェリカ、お前だ」

アンジェリカは目を見開き、しばらくの間にも喋らなかった。しかし、少しずつ、独り言のように言葉を洩らす。

「嘘よ……。だって、そんな、そんなこと……。そんなこと……。っ！」

「本当のことなんだよ、アンジェリカ。俺が、お前の父親だ」

アンジェリカは咄嗟に立ち上がった。混乱を抑えきれぬままに激昂し、クリスへ尋ねる。「クリスが言うことには根拠がないわッ！ クリスが私のパパだなんて、どうして言い切れるの!？」

クリスマスもその場で立ち上がり、既に星が瞬きはじめて空を見つめながら答える。

「ジェシカ。お前が持ってたデディベアの人形だ。アレはな、俺がガキの頃にサラへとプレゼントしたものだ。名前も俺がつけた。いつかダニエルのところへあの人形を取り戻しに行くことがあれば調べるといい。あの人形にはポケットがついてて、その中に俺のラブレターが入ってる」

「サラはどうやら最後まで気づくことが無かったんだろうな。ちゃんとした返事を貰った覚えがない。そして、お前の名前だ、アンジェリカ。お前の名は母親のサラから貰ったものだろう。サラが昔からジェシカを抱いて良く言ってたんだ。『この子がジェシカ、じゃあ私が子供を産んだらアンジェリカね』ってな」

「ジェシカが“天から給うもの”、アンジェリカが“天使の子”だ。極めつけに本物の“天使”からアンジェリカがお前の子だなんて言われちゃってよ。……運命ってのは、よく出来ているみたいだ」

クリスマスは厭世の色を含んだ苦笑をその顔に浮かべる。全てを話終えた。これで自分はまた独りになるのだ。クリスマスはそんなことを思う。

「本当に、パパなの……？」

アンジェリカは顔を伏せ、唇を噛みしめる。クリスマスもまあ先ほどと同じ答えを返す。

「ああ、アンジェリカ。俺がお前の、本当の父親だ」

アンジェリカはクリスの元へ駆け出す。そして、クリスの胸に飛び込み、顔を埋めた。それから小さな嗚咽を交え、クリスに訴える。

「どうして、今まで……っ、黙ってたの……！ ひっく、どうしてなの……！」

クリスはアンジェリカの頭を静かに撫でる。

「俺も、昨日まで知らなかったんだ。いや、それも嘘かな。なんとなく、そんな気はしてた。それでも確信は持てなかったんだ。悪かった」

アンジェリカは顔を上げ、クリスへ言う。

「そうよ、全部クリスが悪いのよ……。私は、私は一体どうすればいいの？」

少しおどけてみせたアンジェリカは、涙を溢しながらクリスへ問う。

「必ず迎えにくる。全てが終われば、必ず。約束だ。だから。今は」

アンジェリカはクリスから一歩離れ、また顔を伏せる。

「一緒には、行けないのね……。それは、どうしてなの？」

「天使が俺に預言を残していった。アンジェリカを巻き込むことになるものだ。それだけは何としても避けたい。これはアンジェリカの父親としての願いであり、お前が知るクリスとしての願いでもある。わかってほしい」

アンジェリカは黙りこむ。クリスもこれ以上の言葉が出てこなかった。

幾ばくかの時間が流れ、やっとアンジェリカが口を開いた。

「――待つてる。私はクリスを待つわ、いつまでも。だから、約束よ。必ず帰ってきて。じゃないと……私、寂しくてきつと死んじゃうわ」

にこりと笑ってみせるアンジェリカにクリスは少し安心し、肩を竦めて溜息をつく。

「ああ、必ず帰ってくるよ。ちゃんという子にしてろよ？　じゃないと怒るからな」
それを聞き、アンジェリカはくすくすと笑ってみせた。

「父親みたいなことを言うのね？」

「そりゃ、父親だからな」

二人は耐え切れなくなり、その場で腹を抱えて笑い合う。

笑い尽くした二人は、お互いに見つめ合う。クリスが先に口を開いた。

「一人でちゃんとナオミのところへ帰られるか？」

「ええ、大丈夫よ。私だってもうそんなに小さくないんだから」

少しの間を置いて、クリスは言う。

「そうか……。じゃあ、俺は行くよ。気をつけて」

アンジェリカも少しの間を開け、答える。

「ええ、また会いましょう。必ず」

クリスはアンジェリカの方へ近づき、頭を数回撫でる。それから、アンジェリカに背を向け、闇夜の中へ消え入るように歩を進めた。

それを見送るアンジェリカは、一つどうしても言いたかったことをクリスの背中へ向け
て叫んだ。

「行つてらっしゃい！　パパ！」

クリスは一瞬歩くのを止め、肩を竦める様な動作をすると、静かに片腕を宙へ挙げ、それからまた歩き出した。

アンジェリカと別れてから一週間ほど経つ。

あてもなく歩き続けたクリスは地図に載っているかも怪しい、小汚く閑散とした小さな街に辿り着いていた。

クリスは寂れたバーでカウンター席へ座り、一人寂しく酒を飲む。出来るだけ、一時的だけでもクリスは自分に降りかかってきた心労を振り払いたかったのだ。

しかし、そんなクリスの横の席へ座ろうとする男がそうはさせてくれなかった。

「……隣に座らせていたかどうか」

「勘弁してくれ。俺は今なかなか参ってるんだ。酒の相手ならもったいい奴がいるはずだぜ」

クリスの言い分に全く動じることもなく、天使はクリスの横へと座る。

「人間というのは実に愚かだ。一時の逃避のために、そんな飲み物で自らを墮落の道へと誘って行く。それは、たまに他人までも巻き込む。嘆かわしい生き物だ」

「はっ。そうだな。同じ主に作られたモノ同士、もう少し穏やかな言い回しがあるんじゃないか？」

「馬鹿を言うな、下賤な。少なくとも、私は不愉快だ。貴様ら人間と一緒にくたにされることなど」

「そうかい、そうかい。こっちもごめんだね。てめえみたいな上からモノを言う奴なんかは特に大嫌いだ」

「ふん、ならば言おう。私も貴様のような“嘘つき”は大嫌いだ。よもや、自覚がないとは言わないだろう。あの娘は帰ってきもしない男を延々と待ち続けるのだ。貴様はとんだ、嘘つきだ」

「……………」

クリスは気分を悪くし、席を立とうとする。しかし、そこへ天使の言葉が遮る。

「お前はまた同じ過ちを繰り返すのか」

「……なんのことだ」

クリスは離れかけた席へ座り直し、天使の話を耳を傾ける。

「前にも言ったが、貴様には様々な試練が常に付き纏う。それは、貴様が神同様の存在へとなるために必要な儀礼だ」

「ちよつと待った。前から聞きたかったんだが。どうして、俺が神にならなくちゃいけないんだ。お前の主は引退でもするのか？ 神ってもんは生涯現役なもんじゃないのか」

「――主は既に疲弊しておられる。それは、随分と遠く昔の頃からだ。とりわけ今すぐにも代わりを必要としている。それに、お前たちが知らないだけで、これは珍しい事例でもない。……いいか、貴様がその器に選ばれた。ただ、それだけのことなのだ」

「随分と勝手に迷惑な話だな。俺の心中も少しは察して貰いたいもんだ」

「ボンクラめ。貴様のような愚鈍な人形には光栄余りある話だぞ。大体、貴様は貴様自身の意思で私と等価交換の契約を交わしたはずだ。あの実の味をもう忘れたのか」

「忘れられるもんなら忘れたいもんだね。ママのおっぱいの味よりよほど覚えてるぜ」

「その下卑た口を今すぐ閉じろ」

言われてクリスは両手を挙げ、肩を竦める。この天使とは全く馬が合わない。どうにも気に食わない奴だ。それこそクリスは辟易として、気分が滅入ってくる。

「それで？ 同じ過ちとは何のことだ。全く身に覚えのない話だが」

クリスの問いに天使は少し口をシニカルに歪ませ、含みを持った言葉を返す。

「貴様、どうしてあの娘から離れたのだ」

「……なんでアンジェリカの話がここで出てくるんだよ」

クリスは素面に戻ったかのように、表情から色を消す。

「貴様には昔サラという女が隣にいた。しかし、貴様はその女と離れ離れになった。それで――、その女は一体どうなったのだ？」

天使の言葉に、クリスは身体へ雷が落ちたような錯覚に見舞われた。身体中が痺れ、目の前がだんだんと真っ暗になっていくような感覚。

「そう気を落とすな、人間。どちらにせよ、起こる結果は変わらない話だろう。あの時も、この時も、だ。言っただろう。これは貴様が全てを許せるか許せないかの試練なのだ」

天使は少し陽気に話す。口元は歪んだままで、どこか愉しげにも見える。

クリスは椅子から立ち上がり、ズボンのポケットからおもぬろに掴んだ小銭をバーカウンターに叩きつけた。

クリスは急ぎ足で店の出入口まで向かい、そして一度だけ後ろへ振り向く。

「――まず、第一にだ。俺はお前たちの存在を許しはしない」

その言葉を聞き、天使はなにも答えはしなかった。

クリスは店を出てから、ちやうど自分の目の前を走り去って行こうとする車に目をつける。そして、その車の前へと飛び出した。

轢かれたクリスはきりもみ状態で地面を転がる。クリスを轢いた運転手は青ざめた顔を
して車内から出てきた。

そこへ、クリスは何事も無かったかのように立ち上がり、ドアが開いたままになってい
る車へ一目散に飛び乗る。

「ちよつと借りるぞ。今度ちゃんと返す。また会うことがあればだけどな」

クリスは車のキーを回し、フルスロットルで車を走らせる。

元の車の運転手はあんぐりと口を大きく開けたまま、しばらくその場から動くことが出
来なかった。

アンジェリカは一人、街を歩く。

既に陽も沈み、少し肌寒い。辺りは仄暗い街灯が辺りを頼りなく照らすだけで、どこか寂しさも感じられた。

アンジェリカは一人、街を歩く。

アンジェリカはナオミから頼まれたお使いの途中だった。

アンジェリカは一人、街を歩く。

クリスと別れてからちょうど一週間だ。アンジェリカはクリスから言われた通り、熱心にナオミの店の手伝いをしていた。いつか自分を迎えに来る父親を待つために、良い子であらうと誓ったからだ。

アンジェリカは寂しさを紛らせるために、鼻歌を唄いながらナオミの店へと帰る。

今ここにジェシカがいれば、幾ばくかの不安も拭いきれる気もしたが、流石にクマの人の形を持って出歩くのは気恥ずかしいものもあり、溜息を一つ洩らす。

こうやって溜息をしてみると、なんだかクリスの癖がうつったみたいでどこか可笑しい。アンジェリカはふと立ち止まり、頭上へ広がる夜空を見上げた。

クリスと最後に見た夜空を思い出す。あの時も、星が綺麗だった。クリスも同じ夜空を見上げているだろうか。そんなことをしみじみと思う。

我に返り、アンジェリカは再び歩みを進める。

アンジェリカの両腕には紙袋に入ったバゲットがある。ナオミにお使いで頼まれていたものだ。今日の晩御飯はクリームシチューらしい。

ナオミさんが作るシチューは世界一美味しい。アンジェリカはそう思う。クリスはこの国の料理じゃないんだから当たり前だと言っていた。それがどういう意味なのかはアンジェリカにはよく分からなかった。

そんなことを考えているとアンジェリカのお腹がぐーと情けない声を洩らした。急いで帰ろう。そう思い、アンジェリカは歩くスピードを速めた。

「おや？ アンジェリカちゃんじゃないか」

唐突に、後ろから呼び声がする。アンジェリカが後ろへ振り返ると、そこには見知った顔があった。

「アドニアおじさん」

アンジェリカはこのアドニアという男を知っている。ナオミの店によく来る常連客だ。物腰が柔らかく、優しい人で、アンジェリカも甘えることがあった。こういう人が紳士なのだとアンジェリカは思う。

「こんな時間にどうしたんだい？ もう陽も落ちてるし、一人じゃ危ない時間だよ」
優しく微笑みながら注意をしてくるアドニアに、アンジェリカはきちんと答える。

「ええ、心配をしてくれてありがとう、アドニアおじさん。ナオミさんに夜ご飯のお使いを頼まれたの。それで、今がその帰り。ちゃんと急いで寄り道せずに帰るわ」

「ああ、そうなのかい？　引き止めてしまつてすまないね。アンジェリカちゃんの良い子だ」

そう言つてアドニアはアンジェリカの頭を撫でる。アンジェリカは少し恥ずかしそうに目を伏せた。

「じゃあ、おじさん。私は行くわね。またお店で会いましょ」

「ああ、そうだね……また、いや、そうだ！　アンジェリカちゃん。ちよつとおじさんの家に寄つて行かないかい？　ナオミさんに渡したい物があるんだ。ついでに紅茶でも飲んで行くといいよ」

「えっと、それは……」

アンジェリカはアドニアからの突然の提案に逡巡する。店でナオミとルツがきつと自分のことを待っている。食事はいつもみんなと一緒にと決まっているからだ。

「いや、アンジェリカちゃんは急いで帰っている途中だったね。いきなりこんなことを言つてすまない。……ただ、直ぐにでもナオミさんに渡しておきたい物なんだ。時間は取らせないよ」

アンジェリカは悩む。そして、悩んだ挙句答えを出した。

「分かったわ。アドニアおじさんのお願いだもの。おじさんの家に行くわ」

そう聞きアドニアは微笑む。そして、アンジェリカはまたアンジェリカの頭を優しく撫でた。

「ごめんよ、おじさんの我がままに付き合わせちゃって。寄り道になっちゃうね。今度またちゃんとお礼はさせてもらうよ」

「いいのよ、アドニアおじさん。私はおじさんのお手伝いをするために寄り道をするの。きつと神様も許してくれるわ」

アンジェリカはにっこりと笑ってみせる。その無垢な笑顔にアドニアはより一層惹かれた。

「じゃあ、行こうか」、その言葉と共に、アドニアはアンジェリカの手を握り、街の路地裏へと歩き出す。

「アドニアおじさんは、その、なんだか暗いところに住んでいるのね」

アンジェリカとアドニアが歩き続けてそろそろだいぶ時間が経つ。

アンジェリカは不安に耐え切れなくなり、アドニアへ話しかける。

アドニアはなにも答えない。まるで人が違ったようだとアンジェリカは思う。

ふと、アドニアが立ち止まる。辺りはまるで人の気配がなく、暗澹とした闇が立ち込める。

なんだろう、胸のあたりが嫌に気持ち悪い。それに、お腹がなにかに押し潰されているかのように重い。気づけば、アンジェリカは名状し難い恐怖に駆られていた。

「あの、アドニアおじさん。私、やっぱり帰る……帰るから、手を、手を離して!!」

ついにアンジェリカは叫ぶ。半ばパニックに陥っていた。だが、その叫びに駆けつける者はいない。

ここでようやくアドニアが口を開く。

「僕の家は少し汚れていてね。すまないけれど、ここで我慢してくれ」

言うがままに、シドニアはアンジェリカへと抱きつき、地面へと倒れこむ。アンジェリカの身体に激しい痛みと悪寒が走った。

「やあ、やめっ! 離してっ! だめっ、助けて!」

アンジェリカの叫びは無情にもアドニアの唇で封じられる。

「ふっ、うん……っ！　だ、ダメえ……っ！　どうしちゃったの、アドニアおじさんっ！」
「ずっとアンジェリカちゃんのが好きだったんだ。ずっと、ずっと。ずっと見てたんだ。愛してるよ。僕はアンジェリカちゃんと結婚がしたい。愛してるよ。大好きさ。愛してる。結婚しよう」

アンジェリカにはアドニアの言葉が悍ましい呪詛のように聞こえた。

もう限界だ。アンジェリカは喚きながら暴れまわる。しかし、相手はアンジェリカの身体を大きく上回る体躯を持った大人だ。

アンジェリカの四肢は強い力で押さえつけられ、ついには身動きひとつ出来なくなってしまうた。

アンジェリカは涙を溢す。

「痛いよお……やめてよお……っ。どうして、ひっぐ、どうしてっ、こんなことするの……っ。いつもの、アドニアおじさんに戻ってよ……」

アンジェリカの哀願に、アドニアが答えることは無かった。

アドニアはアンジェリカの着ている服を無理矢理に剥ぎ取る。膨らみかけの乳房が露わになり、アンジェリカは恥ずかしさと恐怖と混乱とで抵抗することが出来なかった。

「綺麗だ……ッ！　綺麗だよアンジェリカちゃん！　陶器のような白い肌！　美しい！

汚れも！ 傷一つないッ！ これは芸術だよ!! そうは思わないかい!？」

アンジェリカは泣きじやくり、なにも答えない。ただ、心のなかで助けを呼ぶ。叫び続ける。

（クリス……！ クリス……っ！ クリスう……っ!!）

「この身体ならもう赤ちゃんだつて産めるだろう。ううん、味も確かだ。仄かに香る汗の臭いも最高のスパイスだ。食べてしまいたいぐらいだよ、アンジェリカちゃん」

そう言いながら、アドニアはアンジェリカの身体中をその舌で舐めずり回す。

そして、準備は整ったと言わんばかりに、アドニアは自分の獣のようにいきり立った陰茎をズボンから乱暴に取り出す。

「さあ、アンジェリカちゃん。おじさんと一つになろう。少し痛いかもしれないが、我慢しておくれよ」

アドニアはアンジェリカの下着を一気に脱がし、自分のソレをアンジェリカの陰部に擦りつけた。

「やめ、てよお……っ！ どうして、どうして、どうしてッ！」

迫り来る恐怖にアンジェリカは金切り声を上げる。あるだけの力を振り絞り、身をよじる。しかし、必死の抵抗が叶うことはない。

「大丈夫、大丈夫だよ。アンジェリカちゃん。おじさんが一緒にいるからね。なにも怖くない、怖くないんだよ。安心しておじさんの子どもを孕んでくれ」

アドニアはアンジェリカを優しく抱きしめる。それから、自分のソレをアンジェリカへと勢い良くぶち込んだ。

「んっ、あっ、あ、ああああ!! いやあああっ!! やああっ!! いやああああああああああアあっ!!」

アンジェリカは狂ったかのように慟哭の叫びを上げる。それに対して、アドニアは恍惚とした笑みを浮かべる。

「ああ……、なんてアンジェリカちゃんの中は温かいんだ。僕を受け入れてくれるんだね。こんな僕を……ん？ んんッ!？」

瞬間、アドニアの顔がサッと青ざめていく。何か、重大なことに気づいたようだ。

「アンジェリカちゃん……。アンジェリカちゃん。君はもしかして……処女じゃないのかい？」

アンジェリカは何も答えない。ただただその顔に涙を浮かべ、恐怖を訴え続ける。

どうして愛しの彼女は否定をしてくれないのか。どうしてだろう、どうしてだろう。

アドニアの全身の毛が逆立つ。血が沸騰する。瞋恚の念が彼を激情の権化へと変え、ア

ドニアは鬼の形相でアンジェリカに叱咤する。

「——よくも騙したなこのアバズレビッチがアアあッ!! 糞が糞が糞があッ!!」

アドニアは平手で何度も何度もアンジェリカの顔をぶつ。アンジェリカの唇は切れ血が滲み、顔はどんどん腫れていき、見るも無残な形となっていく。

「糞が糞が糞が糞が死に腐れ畜生がッ!! 今の貴様に息をする資格も無ければ、生きる価値すらもないッ!! もっと血反吐を吐いて苦しめ!! 臓物を撒き散らせ!! 地獄に落ちろ!! 死ねえッ死ねえッ死ね死ね死ね死ね死ね死ねえあああああああああああッ!!」

罵詈雑言を喚き散らしながら、アドニアはアンジェリカを犯し続ける。アンジェリカの口からはもう、哀願の叫びが洩れることはない。人形のように、成すがままに、アンジェリカの身体は壊されていく。

アンジェリカは自分に救いがないことを悟ったのだ。朦朧とする意識の中、色々な事に思いを馳せる。

ナオミのこと、ルツのこと、死んだ母親のこと、そして、クリスのこと。

——ああ、私はまだ死にたくない。

アンジェリカはもう一度だけ、流す大きな涙に願いを込め、一縷の希望に全てを賭け

(クリス……！ 助けて……っ!!)

「アンジェリカあああああああああああッ!!」

突然のことだった。アンジェリカは聞こえてきたその声に奮い立つ。

どうして、分からない。気のせいなのか、いや、間違いない。もう二度と聞くことがないと諦めていたその声が、今たしかにこの耳へ聞こえたのだ。

アンジェリカは残るすべての力を振り絞り、大音声で必死に叫ぶ。

「クリスううううううううううううううううううう!!」

叫びに応えるようにして、こちらへ走ってくる足音が聞こえる。アンジェリカは涙を流す。それは絶望から来るものではなく、安堵と喜びの涙だった。

「クリス………!! クリスううううううううううううううううううう!!」

アンジェリカは自分の居場所を伝えるため必死に叫び続ける。その度、足音が近づいてくる。アンジェリカの顔には自然と笑みが溢れた。

——しかし、

「黙れ」

アドニアはアンジェリカの喉元を隠し持っていたナイフで一刺しする。そして、トドメと言わんばかりに腹を裂く。

アンジェリカの口からコポオと嫌な擬音と共に、ドス黒い血が溢れ出る。

「君にはもう用はない。さようなら、アンジェリカちゃん。いい夢を」

アドニアは立ち上がり、服装をサツと正した後、闇夜に紛れるようにしてその場を去っていった。

.....

「アンジェリカーカーカーっ!!」

クリスは戻ってきたのだ。先日までアンジェリカたちと暮らしていた街まで。

借りた車は街の路端へと放り捨て、まずはナオミの店へと急いで向かった。

ナオミから話を聞くと、アンジェリカはお使いに出たまま帰ってきていないらしい。クリスの脳裏にはいよいよ嫌な予感が渦巻き始める。

クリスはおろおろとするナオミを背に、店から急いで飛び出した。

どこだ。どこだ。クリスは街中を走り回りながらアンジェリカを探す。

居ても立っても居られない、クリスは大声でアンジェリカの名を叫びながら探し続ける。

「アンジェリカああああああああああああああッ!!」

返事は返ってこない。クリスは膝に手をつき、立ち止まってしまう。

焦りが募る。心臓の鼓動が不安を煽るように早まる。

クリスは全てに押し潰されそうになっていた。

「クリスううううううううううううううううう!!」

そんな時だった。クリスの耳には確かにアンジェリカの声が聞こえたのだ。

ここからそう遠くはない。クリスはアンジェリカの声が聞こえた方向へ無我夢中となつて走り出す。

「アンジェリカ——————っ!!」

クリスは叫ぶ。今助けに行くと。迎えに行くと。もう離したりしないと。そんな誓いを込めた叫びだった。

「ク……い、す……」

クリスはハッと我に返った。アンジェリカの口がわずかに動いたのだ。アンジェリカの命の炎はまだ消えてはいなかった。

「アンジェリカ！ 良かった、すぐに医者のところへ連れて行ってやるからな！ もう少しの辛抱だ！」

クリスはアンジェリカを抱きかかえる。今すぐにでも立ち上がり、走りだそうとしていた。しかし、

「グ……い、す……。わ、たしあ……、もお……」

クリスはアンジェリカの異変に気がついた。腹部、そして喉元にナイフで穿たれたような穴。そこから大量の血が溢れでている。素人目で見ても、状況は絶望的だった。

「もういい。喋るな、アンジェリカ！ 大丈夫だ、大丈夫だから。パパが助けてやる、必ずだ！ 俺を信じろ！」

アンジェリカはそれを聞き、力の無い笑顔を見せる。クリスも涙を流しながら、出来るだけの笑顔を作ってみせた。

「わ、たし……ね、……とても、しあ、わせ、だった……クリスに、であえて、とても……」

クリスはアンジェリカの命の灯火が揺れて消えかけていることを悟る。しかし、それを受け入れることなど到底出来なかった。

「もういいんだ！ 頼むから、喋らないでくれ……！ 必ず、必ずつ、助けるから……っ！」
アンジェリカはゆっくりと片腕を持ち上げ、クリスの顔へ手を触れる。

「生きていて、とてもよかった……くりすと、であえて、そう思えたの……。んっ、グっ……だか、らね……、最後に、私のわがままを、きいて？」

クリスは目を瞑る。もう、アンジェリカの顔を直視することが出来なかった。

「ああ……ああ、いいとも。いくらでも、聞いてやるさ。何が、何が欲しいんだ？」
クリスは精一杯の優しい声色で応える。全てを、受け入れる準備が出来てしまった。

「最後まで、わたしをだきしめて。こわいの。だから、最後まで。いっしょに、いてくれる……？」

クリスは目を開き、溢れ出る涙を片腕で拭った。そして、笑顔で言う。

「ああ、いつまでも一緒だ。俺はお前を、アンジェリカを、離しはしない」

クリスはアンジェリカを強く、強く、抱きしめた。アンジェリカは幸せそうな笑みを浮かべる。

最後に、アンジェリカはクリスの耳元で囁く。

「大好きよ、パパ」

それから、アンジェリカの口が開かれることは無かった。

クリスは慟哭の雄叫びを上げる。その雄叫びは、街の闇に、悲しく溶けこんでいった。

「その娘を殺したのは一人の男だ。その男は罪を犯した。許されざることだろう。しかし、どうだろう。彼は昨年に事故で妻を亡くしている。よくある通り魔事件だ。巻き込まれたその妻は凄惨な死を遂げた。その事件以来、彼の中にある何かのたがが外れてしまったのだろう。」

「さて、では聞こう。罪の所存はどこにあるのだろうか？ 諸悪の根源を辿っていけば、それはどこまでも根深く、無限に続いているだろう。所詮、お前たちは元来から罪人なのだ。ならば、お前たちは許さなければならない。全てのモノを、全ての事を。そうして初めて自分も許されるのだ。クリス、貴様もそうだ」

クリスとアンジェリカの傍には、いつの間にか天使がいた。

「……これが。これが、お前たちのやり方なのか」

クリスは憤然とした態度で天使を睨みつける。しかし、天使が恐れ慄くことはない。

「違うな。これはお前の犯した罪の代償だ。その双眸で己の運命しかと焼き付けろ。そして、受け入れろ。前へ進め。貴様は神になる男なのだ」

クリスは黙りこむ。その腕に抱かれたアンジェリカを見つめ、唇を噛みしめる。

「確かにこれは試練でもある。貴様が乗り越えなければならない試練だ。しかし、これはお前という存在が引き起こした必然でもある。誰も恨むわけでもなく、自分を呪え。そして、その自分さえもいずれは許すのだ。そうすることで貴様は一つ前へと進める」

クリスは天使の言葉を反芻する。そして、拳を握りしめ、ひとつの決心を固める。

「——俺は、何も許しはしない。アンジェリカを襲ったその男も。お前たちのような存在も。アンジェリカから離れてしまった自分自身もだ。世界の理がそうであっても、俺は抗い続ける。運命だろうと、試練だろうと知ったこっちゃない。俺は抗い続けるぞ。そして、これが俺の答えだ」

クリスは自分の唇を噛む。すぐに血が滲み出た。そして、その唇をアンジェリカの唇に重ねあわせた。

「なっ!？」

初めて天使が驚きの顔を見せる。その行為にどのような意味があるのか、天使は知っていたからだ。

クリスもこの力を授かってから、頭の中で理解をしていた行為だ。どうしてか、知っている。だが、この行為がどれほどの禁忌なのかも理解していた。

しかし、アンジェリカの体温がまだあるうちに。迷っている時間など無い。迷う道理など無い。自分は抗い続けると決めたのだから。

「貴様ッ!! “血”を分けたな!? 生命の知識をッ!! ソレがどういう行為なのか分かってやっているのかッ!?”

クリスは舌を這わせ、出来るだけ自分の血をアンジェリカに分け与える。そして、十分に血を分け与えたあと、アンジェリカの身体をそつと地面の上に寝かせた。

クリスはゆっくりと立ち上がる。

「これが、俺の答えだ」

天使は一步後ろへと退いた。しかし、すぐに狂喜を孕んだ笑い声を上げる。

「ふふ、フハハハハハハハっ! 貴様は大馬鹿者だな! なんと愚かしい真似を!! 貴様自身が知っているはずだ、“定命の者の理”から外れる苦しみを……!! 貴様は自らの手で巻き込んだのだ、己のが運命にその娘を! 子は貴様をいずれ憎むだろう。恨むであ

ろう。なぜそうしたのかと問いたですであらう！」

「——まあ、良い。主は、我々は常に貴様たちを見ているぞ。貴様に試練はまだ続く。その火の粉はその娘にも襲いかかるだろう。いいか、クリスマス。自身の“その名”を忘れるな。くれぐれも、後悔のないように」

天使はそう言い残すと、そのまま光の粒となって消えていく。

その場にはボツリとアンジェリカとクリスマスだけが取り残された。

「不思議なものね。あれだけ痛い思いをしたのに。傷一つ残ってないわ」

アンジェリカは淡々と独り言のように話す。運転席にいるクリスは窓を開け、啞える煙草に火を着けた。

「……それ、やめるって言ってたじゃない」

「……しようがないだろ？ 車の中に入ってたんだから。吸わなきゃ湿気ちまう」

——あの事件から二日が経っていた。アンジェリカは生きている。これからも、永遠に。あの事件の後、すぐにクリスはアンジェリカをナオミの店まで運んだ。ナオミは血で染まったアンジェリカを見て、驚きの声を上げた。しかし、クリスが神妙な顔で「大事には至ってない。怪我もすぐ治る」とだけ伝えると安心した顔を見せ、それ以上はなにも聞いては来なかった。

その翌日、例の屋根裏部屋で目を覚ましたアンジェリカは酷く混乱をしていた。

自分に何が起こったのか。自分がなぜここにいるのか。自分はなぜ、生きているのか。クリスはそんなアンジェリカをまずは抱きしめた。そして、起こった全ての顛末をアンジェリカに話す。

天使に出会ったこと、自分の血をアンジェリカに分けたこと、それ故に不死の身体にな

ってしまったこと。

クリスはアンジェリカに謝り続けた。この先、アンジェリカに待っているのは過酷な運命だ。状況が状況だったとは言え、クリスはアンジェリカに一生恨まれ続けても仕方がないと思っていた。

しかし、当のアンジェリカは慥然とした顔でクリスを軽く突き飛ばし額にデコピンを食らわす。

「バツカじゃないの。呆れちゃうわ。いい？ 私はまたクリスと出会えた。そして、これからずっと私たちは一緒なの。なら、ここは笑って喜ぶところよ？」

アンジェリカはベッドの上からクリスの頭を優しく包み込むように抱きしめる。

「私はクリスを許すわ。そして、クリスを恨むことなんて無い。今も、これからも、ずっとね」

クリスは少しの気の抜けたような笑みを浮かべ、そのままアンジェリカを抱きしめ返した。

そして、そのまた翌日。それが今日だ。アンジェリカとクリスは荷造りえおしてナオミの店から出ることにした。

ナオミはどこか悲しそうな顔をして二人を見送ってくれた。それはナオミの横にいるル

ツも同じだった。

アンジェリカとその二人はそれぞれお互いに抱きしめ合う。

ナオミは「いつでも戻っておいで。私たちはもう家族なんだからね」と言った。

ルツは「アンジェ、また絶対うちに来てね。約束よ！」と言う。

そして、アンジェリカは二人へ「また必ず。戻ってくるわ。だって家族なんですもの」と言つてにこりと笑つてみせた。

ついでといえば、なんだが。ナオミはクリスにも言葉を残した。

「アンタはもう戻ってくるんじゃないよ。アンタからはどうも“疫病神”の臭いがする」
ナオミから最後に送られた言葉が非常に辛辣なもので、クリスは肩を竦め溜息をついたのだった。

それから二人は車へ乗り込み、街を飛び出した。そして、今に至るのだ。

「ところで、この車。誰のものなの？」

「ん？ あー、その、なんだ。友達から借りたんだ。今度ちゃんと返さないとな。……会うことがありやな」

車はあてもなく進む。クリスはこの状況にどこか懐かしさを感じてフツと笑ってみせる。
「ねえ、パパ。私、お腹が減ったわ」

「……その呼び方はやめろ。なんか、恥ずかしいだろ」

アンジェリカは不敵にニヤリと笑う。

「ねー、パパ。ねえねえ、パパ？ あたし、お腹が減っちゃったなー。パパもそうでしょ？」

「ああー!! もう、うるせえ!! 分かったから! 分かったからやめろ!!」

「んー? なにが分かったの、パパ。ねえねえ、パパ、パパ」

クリスはげんなりとした顔をして車を止めた。

「……分かった、降参だ。レストランに行こう。ナオミからも少しばかり金を貰ったしな。

あと少しだけ我慢しろ」

クリスは再び車を走らせる。グローブボックスに入っていた地図を頼りに近場の街を探
す。

「でも、良かったわ。私、クリスにもうひとつお願いがあったの」

クリスは「なんの話だ?」と聞きかけて、アンジェリカが死に際に言った我がままを思
い出した。

「まだ俺に我がままを言いたいのか?」

「我がままというか、これは私とクリスが交わした約束のひとつよ?」

クリスの何のことか、頑張って頭を捻り考える。そして、意外とあっさりその約束を思

い出した。

「——行き先はどちらまで？」

「世界の果てまで」

クリスは応えるかのように車のエンジンを吹かす。

開けた窓から気持ちの良い風が吹き抜け、車内を包み込んだ。

——この子とどこまでも一緒にいよう。それが、世界の果てであろうと。

クリストファー (Christopher) は、英語、デンマーク語の男性名、姓。「キリストを運ぶ・担うもの」を意味する。

— あとがき —

こんにちは、ひものでございます。

当初、この小ライトノベルはノベルゲーム用のシナリオとして準備されたものでした。去年の冬コミのことですね。相方と「ゲーム作っぞ！」と一念奮起し、人生のサクセスストーリーを夢見たものです。

絵師に逃げられるまでは。

まあ、結局冬コミには受かっていなかったなので最悪の事態は免れたのですが。当時は口をぽかーんと開けて呆然としてました。今となっては良い思い出です。

ともあれ、こうしてひとつの作品を残せたことに感動さえ覚えます。昔から「やるぞ!」と言っては有限実行出来た試しがないので。今回やれて良かったです。やる時はやるんだよ、俺。

さて、つらつら書き連ねることもないのでここでひとつお願いを書いてこのあとがきを

終わらせようと思います。

誰か、絵を描いてくれ

というのも、前述した通りうちのサークルには現在絵師がいません。表紙の絵も自分が半年かけて練習した血と涙の結晶でございます。そして、もう一生絵なんて描きたくねえとも言いたいです。餅は餅屋と島本和彦先生も申しております。はい。

ですから、もし絵を描いても良いという方がいましたら是非にご連絡を頂きたいと思っております。いや、ホントに。助けてください。お願いします、なんでもしますから。

最後になりますが、この小説を書くにあたって支えてくれた方々に感謝の言葉を送ります。それと、サークルカットを描いてくれたうらすけ氏にも感謝。

まだできたてホヤホヤのサークルで中卒と東大生がタッグを組むというなんとも異色なコラボレーションですが、今後とも生暖かく見守っていただきたいと思います。

では、またこの作品の続きでお会いできることを祈って。
すべてに、謝罪を。

製作者 ひもの (Twitter: @minamo_i)
サークル: Alice.lips (HP: alice.fail)